

## 巻頭エッセー

1963年に横浜中華街で生まれ、2歳の時に、ケベックに移住。  
最新作『La trilogie coréenne』(2012年)は3つの場所(日本、  
韓国、ケベック)をめぐる自伝的物語である。

## 現代のケベック文学

—「お気に入り」の国において—

ウーク・チョング(作家)



ウーク・チョング氏 M. Ook Chung

最近のエッセイ『Le roman sans aventure』(2015年)において、イザベル・ドネ(Isabelle Daunais)は、世界的な「大きなコンテキスト」におけるケベック文学の影響力を測ろうと試みている。しかし、その決算表は輝かしいものではない。ケベック州の外から見ると、ケベック文学は「フランコフォニー」(原註1)という大きな家族の中で、コロニアル文学やポストコロニアル文学の側に位置づけられるが、しかしケベック文学はそれらの悲劇的でトラウマを含む特徴を共有しているわけではない(例えば、アルジェリアやアフリカ諸国、それにアンティユの島々を考えてみよ)。

とはいえ、その一方で、良い本がないということではない。それら良い本のためには「お気に入り coup de cœur」(訳注)といった表現さえ存在するのだ。ケベック州における文化活動は生き生きと躍動しているのである。1980年代末には、ルイ・アムラン(Louis Hamelin)は『La rage』(1989年)を、クリスチャン・ミストラル(Christian Mistral)は『Vamp』(1988年)を刊行した。アムランは継続的に尊敬されるべきキャリアを積んできた。彼の最近の作品である『La constellation du lynx』(2010年)は1970年10月のテロ事件と戦争法から着想を得た物語で、複数の賞を受賞することになった。しかし、ミストラルの方は、『Vortex violet』(1988年—2003年)シリーズを刊行して以降は、ややその創造の活力を失ってしまったようである。

1980年代・90年代のケベック文学の情景において特筆すべきは、「移動するエクリチュール」(原註2)と呼ばれる新しい傾向が「生粋の」と呼ぶ文学(つまりフランス系カナダ人の文学)を覆い隠してしまったという点である。この現象の意義は恐らくそれまで同じ筋道を辿ってきた文学の息切れ状態、すなわち分離主義的なフランス語話者と連邦主義的な英語話者との永遠の対立関係に対する必要な空気供給であった。しかし、2000年代以降になると、この新しい傾向にはダニー・ラフェリエール(Dany Laferrière)、セルジオ・コキ(Sergio Kokis)、イエン・チェン(Ying Chen)、さらに新しい作家たちとしてアキ・シマザキ(Aki Shimazaki)やキム・チュイ(Kim Thúy)が加わることになる。

1999年春に、ケベック文学はパリのサロン・ド・リーヴルにて名誉招待者となった。開かれの精神を象徴するケベック州代表団には「移動するエクリチュール」の代表的作家たちも含まれていたが、栄誉を勝ち取ったのはガエタン・スシ(Gaëtan Soucy)であった。彼の小説『L'immaculée conception』(1994年)は、プロレタリア地区であるオシュラガ＝メゾヌーヴの落伍者を登場人物にする、非常にモンレアル的な特徴が刻印されていたが、本作が批評界において成功を収めたことはフランス系カナダ人作家の長い伝統と繋がっているといえよう。彼は『La petite fille qui aimait trop les allumettes』(1998年)という彼の最もメディアで取り上げられた作品によって、ケベック文学の頂点へと押し上がった作家である。

近年における刊行物の増大に鑑みるならば、ある意味で、ケベック文学がかつてこれほどまでに

実り多かつたことはなかった。(2010年と2013年に)ケベック人またはフランス系カナダ人作家への文学賞や助成金の審査員となった経験からいっても、私は「ここの」文学的脈動の力強さ、将来を嘱望される、または賞賛しうる才能をはっきりと認めるのである。

そのような中において、特別の評価が与えられるべきは、私見では現在カナダで最もノーベル賞に近いと思われるマリー＝クレール・ブレ(Marie-Claire Blais)の作品に違いない。彼女の小説連作は『Soifs』(1995年)に始まり、その後現在までに6作品が続いているが、この連作はその形式的巧みさと内容的豊かさにおいて注目に値するものであり、アメリカ大陸に関する巨大な社会的フレスコ画を成している。ケベック文学という土地に文学的大伽藍が立てられたとするなら、それは正しくマリー＝クレール・ブレの作品である。

さて、新しい傾向の中でも、私が特に取り上げたいと思うのは、先住民系の女性作家たちの声である。例えば、ジョゼフィーヌ・バコン(Joséphine Bacon, 原註3)、リタ・メストコシヨ(Rita Mestokosho, 原註4)、ナターシャ・カナペ・フォンテーヌ(Natasha Kanapé Fontaine, 原註5)が挙げられる。これらアメリカ先住民の女性詩人たちは、先住民の言葉とフランス語という2重の方法によって自らを表現しており、このことによって彼女たちの文章を読むことが可能になっている。これらの女性詩人たちに加えられるのは、先住民たちを物語に登場させるフランス語話者のケベック人による物語である(シャンタル・ポトゥヴァン(Chantale Potvin)の『Le pensionnaire』(2010年)、ジュリー・エテユ(Julie Héty)の『Baie Déception』(2009年)、マルク・セガン(Marc Séguin)の『La foi du braconnier』(2009年))。これらの作品の主人公たちは、しばしば彷徨者(ホームレス)や社会的周縁者であり、彼らはケベック社会の難聴状態に対して生き辛さ、または怒りを表現する者たちである。「インディアンの血」というテーマについては、既にルイ・アムランの『Cowboy』(1992年)において扱われていた。

このような現代ケベック文学のトポスは、次のような3つの空間に区分されているといえる。まずは、都市型小説(オリヴィア・タピエロ(Olivia Tapiero)の『Les murs』(2009年)と『Espaces』(2012年)、ジャン＝シモン・デロシェ(Jean-Simon DesRochers)の『La canicule des pauvres』(2009年)と『Le sablier des solitudes』(2011年)、ピエール・サンソン(Pierre Samson)の『Arabesques』(2010年)、ミカエル・デリール(Michael Delisle)の『Tiroir No. 24』(2010年)と『Le feu de mon père』(2014年))、次に地域型小説(ジョスリン・ソシエ(Jocelyne Saucier)の『Il pleuvait des oiseaux』(2011年)、ラシェル・ルクレルク(Rachel Leclerc)の『La patience des fantômes』(2011年)、サミュエル・アルシバルド(Samuel Archibald)の『Arvida』(2011年)、レイモン・ボック(Raymond bock)の『Atavismes』(2013年)、メラニー・ヴァンスレット(Mélanie Vincelette)の『Polynie』(2011年)、フレッド・ペルラン(Fred Pellerin)の説話)、そして異郷を語る小説(エリーズ・テュルコット(Élise Turcotte)の『Guyane』(2011年)、ダニー・ラフェリエールの『L'énigme du retour』(2009年)、キム・テュイの『Ru』(2009年)、エマニュエル・カタン(Emmanuel Kattan)の『Nous seuls』(2008年)、『Les lignes du désir』(2012年)、『Portrait de la reine』(2013年))である。

終わりに、このエッセイは網羅的なものではないことは言うまでもなく、また現代ケベック文学のアンソロジーに登場すべき全ての作家に言及したわけでないことを言い添えておこう。

原註1: 以下の対談集でも、ベルナール・アスィニウィ(Barnad Assiniwi)、ジャック・ゴドブ(Jacques Godbout)、ナンシー・ヒューストン(Nancy Huston)、アントニンヌ・マイエ(Antonine Maillet)、ミシェル・トランブレイ(Michel Tremblay)との対談が掲載されている。『La langue française vue d'ailleurs : 100 entretiens réalisés par Martin et Christophe Drevet』, Casablanca, Tarik Édition, 2001.

原註2: 「ケベック市の創設400周年を記念するために2008年に刊行された記念碑的著作『Histoire de la littérature québécoise』において、ミシェル・ビロン(Michel Biron)、フランソワ・デュモン(François Dumont)、エリザベト・ナルド＝ラファルジュ(Elisabeth Nardout-Lafarge)の3人の著者は、ケベック文学史の第5段階、つまり最新の段階を、1980年代から流行した移動文学の誕生に当てている。」(Junga Shin et Yong Ho Choi, « De l'espace transculturel : le transculturalisme revisité à travers la littérature migrante du Québec », dans *French Cultural Studies*, Vol. 26 (1), 2015, pp. 101-112.)

原註3: これまでに『Un thé dans la tundra / Nipishapui nete mushuat』(2013年)、『Nous sommes tous des sauvages』(2011年)、『Bâtons à message / Tshissinuashitakana』(2009年)、『Aimititau! Parlons-nous!』(2008年)を発表しているが、すべて多文化主義的な使命をもった小さな出版社メモワール・ダンクリエ(Mémoires d'encrier)から刊行されている。

原註4: 代表作として『Eshi Uapataman Nukum』(1995年)や『La Mer navigue / La Terre marche / Le Ciel vole / et moi, je rampe pour humer la vie...』(2002年)などがある。

原註5: 代表作として『N'entre pas dans mon âme avec tes chaussures』(2012年)や『Manifeste Assi』(2014年)などがある。  
訳注: 「お気に入り coup de cœur」とは、ケベック州の書店でお薦め書籍に貼られるシールに書かれた言葉

## インタビュー

モンREAL大学名誉教授。1960年代より、同時代のケベック文学、延いてはフランス語圏文学全体を視野に入れた研究を続けてきた。また著名な短編小説家でもある。研究書の代表作に『La fabrique de la langue』がある。

### ケベック文学における言語

— リズ・ゴーヴァン氏に聞く —

— 文芸評論家として、あなたはフランス語圏文学の複数性について論じ続けていらっしゃいます。5つの大陸にまたがるフランス語圏諸文学には、何らかの共通点が存在するとお考えですか？

リズ・ゴーヴァン (Lise Gauvin, 以下LG): ご返答として、ここでは私の論考を参照したいと思います。

「フランス語圏の作家は、一定の共通点を共有しています。第一に挙げられるのは、互いに解き難く関わる苦悩と発明の双方の起源であるところの、言語における不安です。例えば、この視点から見て典型的であるガストン・ミロン (Gaston Miron) の作品は、この言語の不安を例証します。彼は次のように述べています。『難破者のように、私は自らの言語のすべての拮据において、自らを発明する。』言語同士の近隣性、そしてそれらの言語がしばしば浸っているダイグロシア状況は、私が「言語的超意識 *surconscience linguistique*」と呼ぶ状態を、フランス語圏の作家の内に生み出すのです。

ある程度までそれぞれの作家が自らの言語を改めて発明しなくてはならないとしても、フランス語圏の作家には、次のような特徴的状況があります。つまり、彼らにとってフランス語は生得のものというより、むしろ絶えざる変動と修正との場や機会であるという点です。このような状況から、例えば、次に挙げるような作家たちの特徴的仕事が生まれました。マリンケ語のリズムと思考方法を刻み込んだ自分自身のエクリチュールの言語を生み出したアマドゥー・クルマ (Amadou Kourouma)。フランス語以外のベルベル語やアラビア語といった言語との接触の結果、多様な時間性を混濁させた複雑な物語の中で、自らとフランス語との関係をテーマにし続けたアジア・ジエバル (Assia Djébar)。マニフェスト『クレオール性礼賛』の共著者であるアンティユの作家たち、例えば叙事詩を日常的な言葉で語るため歴史に訴えかけてきたパトリック・シャモワゾー (Patrick Chamoiseau) やラファエル・コンフィアン (Raphaël Confiant) の作品。または、レジャン・デュシャルム (Réjean Ducharme) による言葉の発明やジャン＝ピエール・ヴェルヘゲン (Jean-Pierre Verheggen) による挑発的意図をもった言説も挙げられます。とはいえ、以上のような早急な宣言によって、書くという仕事もつ繊細さそのものや、「言語のくぼみ」で書いていると自称するフランス・デーグル (France Daigle, アカデー出身) のような作家につきまとう失語症の危険を忘れることになってはならないでしょう。」(参照: *D'un monde à l'autre : tracés des littératures francophones*, Montréal, Mémoire d'encrier, 2013, pp. 8-9.)

ケベック文学はこのようなフランス語圏列島に所属してはいますが、次のような違いもあります。ケベック州には、既にその作品を正統化・聖化する段階である複数の出版社が存在し、かなり制度化されているのです。

— あなたが刊行されたインタビュー集のタイトルが示すように、フランス語圏の作家は複数の言語や文化の交差点にて仕事を行っているといえます。このような観点から見て、現代ケベックの作家にとっても、相変わらず言語の選択は関心を引くテーマであるとお考えでしょうか？



リズ・ゴーヴァン氏 Mme Lise Gauvin

LG: 言語の選択は、どんな作家にとってであれ、関心を引くものであるといえます。ただ、ケベック文学においては、その始めの段階から長らく、この選択はいつもの考察や立場決めの対象となってきました。民衆の言葉を活用する様々な方法が、ガブリエル・ロワ (Gabrielle Roy) からミシェル・トランブレイ (Michel Tremblay) やレジャン・デュシャルムといった作家たちにおける、多様な美学を生み出してきました。とはいえ、現在の作家たちは、すでにこのようなエクリチュールの言語に対するコンプレックスからは脱しています。彼らは自らの居場所において言語的な財産を受け取るようになり、また基本的には言語選択も扱われるテーマや描かれる領域に従って行われています。

— 2013年12月に、ダニー・ラフェリエール (Dany Laferrière) がアカデミー・フランセーズ会員に選出されました。このような文学的事件は、ケベック州においてどのような反響を生みましたか？また、このような文学的成功によって、今後も「移動文学 *littérature migrante*」はケベック文学において存在感を維持し続けるとお考えでしょうか？

LG: この選出については、ケベック文学に関わるコミュニティによって熱狂的に迎えられました。それというのも、ラフェリエールの作品はまずはケベック州において出版され、批評家によっていつも好意的に受け入れられてきたからです。移動文学については今も存在しておりますが、もはやそのように呼称されることはなくなりました。この言葉は、1990年代のケベック文学の舞台上に、他の場所出身の幾人もの作家たちが現れたことを明示するために利用されてきたカテゴリーです。今日では、それぞれの作家が個人的な道程を追求するようになっていて、今では「移動作家 *écrivain migrant*」という呼称によってよりも、何より作品それ自体によって認識されるようになりました。このことは、かつて「移動するエクリチュール *écriture migrante*」という呼称を提案したエミール・オリヴィエ (Émile Ollivier) が望んでいた状況でもあります。

— 現在まで、あなたは批評家だけでなく短編作家としても活動し続けてきました。あなたにとって、批評家と作家の仕事との間に、どのような関係がありますか？

LG: これらの仕事は大きく異なる活動であって、それらの間にはほとんど、あるいは全く繋がりはありません。つまり、フィクション作家として白紙のページを前にする時には、文学テキストを読み・批評するという活動が、私にとって助けになることはありません。その時には、私はもう一人の私、より親密な(内奥の)私に耳を傾けなくてはなりません。このもう一人の私とは、世界を観察し、それに対して感じる感情を言葉に翻訳しようとするものなのです。(質問者・翻訳: 廣松 勲)

## エッセー

1943年生まれ。ケベック大学シクチミ校教授で、歴史学・社会学・文学といった多様な領域で活動してきた。近年では、2007年に発足された多文化共生の実態を調査した「ブシャール・テイラー委員会」の代表者としても著名。

ひととき

### ジェラルール・ブシャールとの一時

立花 英裕 (早稲田大学)



ルイ・エモンの碑の傍で (立花撮影)

2014年の9月から15年1月初めまで、モンレアル大学の研究員としてモンレアルに滞在した。在外研究によるもので、わずか4カ月だが、短期滞在とは違う貴重な経験を積むことができた。たとえば、以前に来日したことのある人に再び会うのでも、その人の活動拠点で会えば自ずから雰囲気も変化する。再会の中で特に印象的だった一人が、ケベック大学シクチミ校のジェラルール・ブシャール(G rard Bouchard)教授だった。

11月末、ブシャール教授は、私が投宿しているシクチミのホテルまで車で迎えに来てくれた。道路脇には数日前に降った雪がまだ残っていた。「どこに行きたい？どこにでも連れて行ってやる」と彼は言う。私は遠すぎるとは思ったが、おずおずと試みてみた。「サンジャン湖に行けたらいいですが、今からじゃ無理ですね」彼は大きく頷いて、車を滑るように走らせた。私たちは、『マリア・シャブドレーヌ』の著者ルイ・エモンが滞在したペリボンカ村まで行くことにした。さすがに距離があったが、ブシャール教授はハンドルを手にどこまでもおしゃべり続け、両親のこと郷土のことを話してくれた。私が、『マリア・シャブドレーヌ』に一度だけブシャールという名前が出てくるが、関係があるのかと尋ねると、大きく頷いた。

しばらくすると、辺りは彼が子ども時代を過ごした田園地帯だった。驚いたのは、彼の父親がトラックの運転手だったことだ。5歳の頃から父のトラックに乗せてもらったそうだ。初冬の色褪せた畑を指さして「父の夢はtr carr eを持つことだった」と彼は笑う。トレカレとは、森林を伐採した後の一区画を端から端まで掘り返して耕作できるようにした土地のことである。父親は働き続け、ついにトレカレの所有者となったそうだ。私は、そんな血と汗の努力家の家庭から、ケベック州の首相になるリュシアンとカナダを代表する学者ジェラルールが出たことに驚嘆した。話は逸れるが、カリブ海のフランス旧植民地マルティニクの巨大な詩人エメ・セゼールも豊かとは言えない家庭に育ち、進学を断念した父親に鼓舞されている。あまり注意されないが、植民地や植民地的状況で育った人たちの向学心には強烈なものがある。アフリカを含め、そうした地域や、国際都市の貧民窟か郊外からこそ、次の時代の独創的な才能・知性が出てくるにちがいない。

私の目は、ふと、ハンドルの上に無造作に置かれ、自在に操っているブシャール教授の手に吸いつけられた。郷土小説『ピコーバ Pikauba』を思い出した。周知のように、彼は小説も書く。主人公レオは恋をする。相手はつなぎを着てトラックを乗り回す若い女だ。彼もトラックに乗って彼女を追い回すが、想いが遂げられず、とうとう自暴自棄になり雨の降りしきる夜の森の中を暴走する。すると、なんと彼女のトラックが闇からヘッドライトを照らして現れる。二人は、乗り捨てた車のライトが交差する地面で泥まみれになって結ばれる。トラック同士が鬼ごっこする恋愛小説なんて初めてだが、著者にはエンジンやモーターへの愛着がある。この学者の限りない底力がそこに秘められている。恋人は貧しい白人女、レオは白人の父と先住民の母をもつ混血私生児。開拓地の人々の行き場のない叫びがアクセル音になる。ジェラルール・ブシャールの、洗練されて泥臭い、とでも言うしかない歴史観から蒸気が立ち昇ってくる。一箇所だけ、つれない恋人との会話を引用しよう。ストーカー紛いの混血男への辛辣な皮肉とそれを押し返す返事には含蓄がある。

「あなたって、野蛮人にしてはおしゃべりなのね」

「俺に言わせてもらえば、君は白人にしては強情だ」

二人は口を噤んだ。

ブシャール教授もおしゃべりだが、メティ(混血)ではないだろう。それでも、矛盾した性格に苦しむ主人公は著者の分身なのだ。彼の主人公はたいてい先住民の血を引いている。なぜなのか。車中で彼が漏らした一言が耳に残っている。「白人入植者と先住民は良好な関係にあったが、それを壊したのがエリートだよ」。

## ケベック文化を表象することば

スティーブ・コルベユ（静岡大学）

フランス語で書かれたケベック文学(註1)が注目されるにつれ、多くの作品の背景に共通して存在するアイデンティティの問題が表れてきた。主に、植民者であったフランスのルーツを持つケベック人が、本国から切り離されて、被植民者となった状態をどう理解するべきか。又、フランス語は自己を表現するために、果たして適切なことばであるかどうか。更に、宗教、特にカトリック教は、ケベックの世界観にどのような役割を果たすべきか。現在のケベック文学は、新しい関心事(移動文学、グローバル化、ポストモダンティ)が加わってきたが、形は変化したにせよ、根本的なアイデンティティ問題が未だ存在する。それについて初めて議論が交わされたのは、詩人オクターヴ・クレマジー(Octave Crémazie, 1827年-1879年)と歴史家・文学評論家のアベ・カスグラン(Abbé Casgrain, 1831年-1904年)と言えるだろう。それを機に、19世紀からケベック文学は国内の文化的、社会的な役割や重要性を証明し、又は海外からの評価を得るため、様々な問題に正面から取り組む必要性が生じてきた。両者はアメリカ大陸に生まれた独特の存在であるケベック文化の将来性に関して希望と期待を感じていた。しかし、一方でそれは植民地文学であり、古典主義の時代(フランス17世紀)のラシーヌとボシュエのような文体と思想を超えることが出来ないと考えたクレマジーは悲観的スタンスを持っていた。「カナダに欠如しているものは、国語と呼べるものがないことだ。もし、イロコイ語、又はヒューロン語で話せるのなら、我々の文学は生きていけるだろう」(註2)クレマジーはカスグランへの手紙にこのように記している。つまり、ある国の文学が多くの言語に翻訳され、評価されるための必須条件は国語である、ということだ。

一方、カスグランは言語そのものというより、世界観とそれを描写するための文体の独創性を強調し、ケベック文学にはそれが豊富にあると訴えた。又、聖職者であるカスグランは、カトリックの宗教に基づいているからこそケベック文学は正しく発展すると信じた。その目標はたとえフランス語であっても達成できると強調した。

今日、ケベック文学において先住民族の言語を主として用いることは考えにくい。又、カトリックの思想やケベック社会の状況を描いた作品も珍しくないが、テーマの大半はカスグランが言うカトリック賛美というよりもむしろ、神父の職権濫用などを批判するものである。時代と共に、クレマジーとカスグランのビジョンは変化し、批判されてはきたが、ケベック文学を読み解く手がかりとして、フランス語を保持しながらも独立を目指してきた文化だと考えることも可能だろう。特に、1960年から、ケベック文学の作家は更に文学の社会的役割を意識し、特にケベック人が話すフランス語を作品の素材として利用した。ケベックの口語には多くの種類があるが、最も注目されたのは「ジュアル」(joual)である。そもそもモンレアルの口語を示すが、文学におけるジュアルはアイデンティティの問題に関わる独特なフランス語の表象である。そのジュアルの特徴として、英語の単語や文法が一部取り入れられていること、ケベック人と宗教の複雑な関わりを示すカトリック用語を源とする冒涇の言葉、又、発音面での特徴が挙げられる。60年代若手の劇作家であり小説家でもあるミシェル・トランブレ(1942年-)をはじめ、若い作家たちはジュアルの使用によって社会的に低い地位におかれ、劣等意識をもつケベック人の苦悩を描き、それと同時にフランス文化に対するコンプレックスを解き、ケベックのアイデンティティの重要性を訴えた。

その後、ジュアルのみならず、ケベックで使用されている様々なフランス語が文学に積極的に表象されてきた。一例として、ケベック州以外に生まれ、その後ケベックへ移住した人々も、ケベックのフランス語を更に多様化させることとなった。その新しい声によって、ケベックの歴史と文化は別の観点から再考され、世界的にも注目されるようになり、ケベックの文化と社会を映し出すことばが誕生したと言えるであろうし、クレマジーとカスグランの期待に応えたとも考えられるだろう。

註1: 「ケベック文学」が何を指すかは様々な解釈があるが、本論では、いわゆるケベック文学史に挙げられる作品全般を対象に考えることにする。

註2: « Ce qui manque au Canada, c'est d'avoir une langue à lui. Si nous parlions iroquois ou huron, notre littérature vivrait. »



プラス・サン・アンリ駅構内  
(佐々木撮影)



## ガブリエル・ロワと現代ケベック

佐々木 菜緒 (明治大学)

20世紀半ば、ケベック社会は大きな変革の時期にいた。先ず1940～50年代は大戦によって刺激された諸々の産業発展及び都市化や、戦後の経済発展の中で人々の生活は近代化する。そして1960～70年代、ケベック特有の政治的文脈における近代化「静かな革命」によって従来のフランス系カナダ観から新しい文化的アイデンティティ「québécois」を形成していく。古いケベックから新しいケベックへと様々に変容する中で一定の距離を置いてケベック社会の問題を見つめた作家がいた。フランス系カナダ人でマニトバ州出身のガブリエル・ロワ (Gabrielle Roy) である。彼女は現代ケベックを代表する作家であり、近代化以降ケベックの人々が身近に抱える問題に目を向けつづけた作家である。

ロワの処女作『東の間の幸福』の果たした社会的役割は広大無辺である。1945年に出版された作品にも拘らず、その社会派リアリズム性ゆえに今日のケベック州民に静かな革命時期を代表する文学作品とされている。また、筆者の個人的体験によれば、ケベックの中高等教育で古典として読まれる『東の間の幸福』の作者がマニトバ州出身である事実は一般的にあまり知られていない。それほどにケベック的文学作品なのである。それは、同作品には新しいケベック人意識の下で認識し変革すべき社会的格差、すなわち裕福な英語系と貧しい仏系住民の社会的格差が描かれているからである。

けれども、ロワの関心はケベック的意識の先導にあるのではなく、むしろ劇的に変容する現代の日常生活において「いかに生きるか *comment vivre*」と問うことにある。この点で、『東の間の幸福』における主人公の母親ロザンナは主人公と同程度の存在感を持ち、そしてこの種の問いを体現する代表格である。伝統的価値観を持つロザンナが都会の貧しい暮らしの中で「人生は望むようにならない。できることをやるんだ」(*Bonheur d'occasion*, p. 89) と言うとき、そのことばの中には田舎と都会生活のずれ、仏系住民と英語系住民の生活レベルのずれ、様々な理想と現実のずれに対する葛藤と受容の姿勢が集約されている。

この「いかに生きるか」の問いは、『東の間の幸福』以後の作品にも引き継がれている。例えば、戦後の経済発展によって大衆化、資本化するモンリアル社会が舞台の『アレクサンドル・シュヌベール』(1954) や、1960年代以降ケベック政府の北部開発によって文明化を強いられたイヌイット社会の葛藤を描いた『休息なき川』(1970) などである。これらの作品は、都会であれその都会からはるか北方の地域であれ、当時同じようにケベックの人々の実生活に影響を与えた近代化の意味を問いかけている。文化的アイデンティティ問題の傍らで、ロワは基本的な現代ケベックの問題を見つめたのである。

実のところ、『東の間の幸福』以降のロワの作品は当時ケベックの文学界においてそれほどの存在感を持たなかった。それはやはり、静かな革命からの「ケベックらしさ *québécoisité*」を目指す文化的運動に対してロワが一步距離を置いていたからである。ロワは広義のフランス系カナダに属し、20世紀の社会変動の中で日常を生きる「小さき人々 *petit peuple*」に一貫して関心を持っていた。ロワの文学作品が今日においても或いは日本の私たちにとっても本質的な人間条件の問題を問いかけているのは、彼女がケベック社会に対してこうした第3者的視点を持っていたからである。

近年のロワ研究では、14の長編、短編作品とエッセイ集のうち半分近くを占める自伝的作品への関心が比較的強かったが、同時に『アレクサンドル・シュヌベール』の作品の基になった短編、草稿研究が進み、そのおかげで、同作品への関心が増えている。大量の情報に囲まれて世の中に埋もれた人間の苦悩を描いたこの『アレクサンドル・シュヌベール』は、今日のケベック社会に「いかに生きるか」を改めて問いかける作品である。このように、かつてロワ独自の立場でケベック社会を描いた作品たちは、今後さらに現代ケベックの人々がより良く生きるために身近なレベルで疑問を付す役割を担っていくに違いない。



モンリアルの旧市街  
(佐々木撮影)

## ケベックの女性文学の特徴とその変容

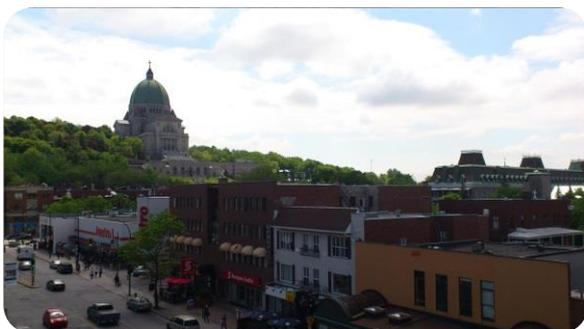
山出 裕子 (明治大学)

ケベックでは、1960年代の「静かな革命」とよばれる変革期を経て、女性たちの姿が社会において見られるようになった。1970年代頃には、第2波フェミニズムと呼ばれる女性運動が盛んになり、女性文学にもその影響が見られた。例えば、この時代には、「女性らしい文体」(écriture au féminin)を構築する為の様々な実験的な作品が見られたが、これはフランスのフェミニズム運動で見られた「女性の文体」(écriture féminine)を確立するための動きや、アメリカのフェミニズム運動で見られた、私的なことを公的に語るための自伝文学の隆盛に影響を受けたものであった。その結果、ケベックのフェミニスト作家であるニコール・ブロッサル(Nicole Brossard)やフランス・テオレ(France Théoret)などの作品には、それまでの既存の文学的ジャンルや文学的特徴の境界を越えた、多様な女性の経験を語るための混濁性の特徴を持った文学スタイルが創り出された。

1980年代になると、ケベック文学全体に移民たちによる作品が顕著に見られるようになり、文学評論家たちはこの時代に見られるようになった移民たちによる文学を、「移民の文学」(écriture migrante)として特徴付けた。これは、単に移民たちが発表した文学作品を意味するのではなく、移民たちがケベック内の様々な民族や文化、アイデンティティの差異を越えて、混濁性の特徴を持った文学を創り出したことを意味する。特に女性文学では、アラブ系作家の作品が見られるようになり、その例としては、レバノン出身のナディーヌ・ルタイフ(Nadine Ltaif)などがあげられる。彼女たちの作品では、ケベックの女性文学の一つの特徴となった「女性らしい文体」が、アラブ系女性たちの経験を語るための手段として再生され、アラブ系文化とケベック文化の両方の特徴を持つ文学が創り出された。これらの移民女性たちの作品とは、必ずしも、フェミニズム運動で見られたような、女性の権利を主張するものではなく、むしろ、ケベックの文化を吸収しながら創り出した、新たな女性としての生き方を描くものであった。

1990年代になると、さらに多様な民族的背景を持った移民女性たちによる文学が見られた。特に、それまでその姿をケベックの文学で見ることの出来なかったアジア系の女性たちの作品が見られるようになり、ケベック内外で高い評価を受けた。例えば、1989年に中国系のイン・チェン(Ying Chen)が最初の作品『水の思い出』(La mémoire d'eau)を発表し、第3作の『親不孝者』(L'ingratitude)では、フランスの権威ある文学賞であるフェミナ賞にノミネートされた。1999年には、日系のアキ・シマザキ(Aki Shimazaki)が最初の作品『ツバキ』(Tsubaki)を発表し、2005年に発表した第5作『ホタル』(Hotaru)で、カナダで最も権威ある文学賞とされるカナダ総督文学賞(フランス語小説部門)を受賞した。さらに、ベトナム系のキム・チュイ(Kim Thúy)は、2009年に発表した最初の作品『小川』(Ru)で、同賞を受賞した。

近年のケベックの女性文学では、アラブ系、アジア系など、様々な民族的背景を持った移民作家の作品が見られる。これらの作品では、ケベックのフェミニスト作家たちによる「女性らしい文体」の影響が見られ、「移民女性らしい文体」とも呼べるような、新たな文学スタイルが創り出されている。このことは、移民女性が、昨今のケベックの混濁性文学の新たな担い手となっていることを示すだけでなく、ケベックの女性たちによって創り出された女性のための文学スタイルが、移民女性たちによって再生されることで、さらに発展していることを意味する。ゆえに、ケベックの移民女性たちによる文学は、近年のケベック文学全体に新たな特徴を作り出していると同時に、北米のフランス語圏において創り出される文化変容のもう一つの形として、ますます注視していく必要があるであろう。



コット・ドゥ・ネージュ通りから見た  
サン・ジョゼフ礼拝堂 (廣松撮影)

## ケベックにおける「新しい郷土」の芸術

廣松 勲 (法政大学)

1980年代以降のケベック文学研究における一つの潮流として、移民作家(一世にせよ二世以降にせよ)の作品を分析対象とする研究がある。日本におけるケベック文学研究においても、ケベック州における研究状況を引き継ぐ形で、移民作家の作品における文体・語り・構成・テーマに何らかの共通項を探ろうと、「移動するエクリチュール *écriture migrante*」といった分析概念を基礎にした研究が進められている。

ケベック文学の歴史を概観してみると、このようないわゆる「移動文学 *littérature migrante*」はもう一つ別の作品群と対照的な関係にあるといえる。それは「郷土小説 *Roman du terroir*」と呼ばれる作品群であり、主にケベック州各地域の風土、特に厳しい風土の中で生き残ろうとする農村地域に焦点を当てたものであった。ケベック文学史では、一般にこの作品群は19世紀中頃から第2次大戦後の期間に位置づけられてはいるが、現在においてその流れが途絶えてしまったわけではない。とりわけ、2000年代以降、ケベック州の地域・地方を舞台とする文学作品が多く刊行されるようになってきている。

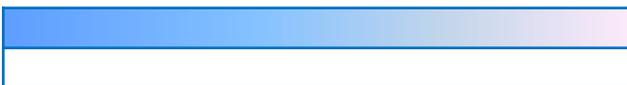
或る意味で、この地域文化への関心は、それまでの都市(特にモンリアル)中心の文学作品への“反発”であるだけでなく、さらに深読みをすれば、いわゆる移民の悲哀を物語にするような文学作品への対抗軸であるとも考えられるかもしれない。いずれにせよ、このようなケベック文学における“新しい”潮流は、既に2006年頃にはケベック州の研究者や作家たちによって「新しい郷土 *néo-terroir*」や「新しい地域主義 *néo-régionalisme*」、さらには「チェーンソー派 *école de tché'n'ssâ*」(斧ではなくチェーンソーによる木々の伐採という変化が文学的潮流の変化に重ねられている)といった呼称まで与えられ、一定の文学的ジャンルとしてその地位を固められつつある。とりわけ、モンリアル大学のブノワ・ムランソン(Benoît Melançon)のブログにおける言及は、このような地方回帰の流れがそれとして社会的に認知される際に大きな影響力をもった。この文学的潮流に分類される作家は必ずしも若い作家だけではないが、例えば2000年代以降に作家活動を始めた作家としてガブリエル・アंकティル(Gabriel Anctil, 1979年生)の『*Sur la 132*』(2012年)、サミュエル・アルシバルド(Samuel Archibald, 1978年生)の『*Arvida*』(2011年)、ニコラ・ディクネール(Nicolas Dickner, 1972年生)の『*Nikolski*』(2005年)が挙げられる。

このような地域・地方文化や伝統への「回帰」は、「ケベック・ナショナリズム」の再燃とも繋げたくなるが、しかしこの潮流の誕生と同時期に、多文化共生のための具体的対応策を探る「ブシャール・テイラー委員会」が発足されていたこともその社会的背景としては興味深いところである。さらには、地方文化・伝統への回帰は、文学だけではなく他の芸術分野(ネオ・トラッド系のバンドであるメ・ザイウー(Mes aïeux)、語り部フレッド・ペルラン(Fred Pellerin)の口承文芸)においても同時並行的に生じていたことも特筆に値する。

以上の観点から見れば、近年の「新しい郷土」へのまなざしとは、ケベック文学における「定住」と「移住」というテーマの往復運動の一局面であるとも考えることもできるだろう。今後、「新しい郷土」文学と移民文学との比較分析が進められことで、ケベック文学研究においても新しい分析概念が生まれ出ることも予想される。ケベック文学において観察しうるこのような「文学界」の変容が、他のフランス語圏においても観察可能なものなのかどうか、あるいはケベック文学の特殊性なのかについては、今後も検討を進めていきたい。



アルヴィーダの街並み(左) アルヴィーダの図書館(中央、右) (立花撮影)



## ケベックの演劇

神崎 舞 (摂南大学)

ケベックは舞台芸術が盛んな州である。サーカスやダンスは言うまでもなく、ケベック演劇において、しばしば指摘されるのが、身体表象や映像などの導入による視覚性である。その理由としてまず考えられるのは、ケベック州がカナダにおける唯一のフランス語圏という事実である。フランス語の壁を超え、異なる言語を母語とするカナダの人々にケベックの舞台芸術を理解してもらうための手段が必要であった。また、ケベックの演劇史を紐解くことでもう1つの要因、すなわち政治色に染まった言語からの脱却が浮かび上がる。

1960年代、ケベック演劇に大きな変革が起こる。その立役者の1人が、劇作家のミシェル・トランブレ (Michel Tremblay, 1942-) である。それまでパリのフランス語が主流であったケベックの演劇界で、トランブレは『義姉妹』(Les belles-sœurs, 1965) に代表されるように、作中にジュアル(ケベックで話されるフランス語の俗語)を取り入れて当時の観客に衝撃を与えた。彼の作品は、1960年代に起こった「静かな革命」と呼ばれる近代化により生じた、ケベコワとしてのアイデンティティを探求する動きと呼応し、ケベック演劇の構築に大きく寄与したのである。言語による変革を行ったトランブレに対し、1980年代以降、「静かな革命」と結びつき政治性を帯びた言語から逃れ、視覚的な表現を取り入れようとする演劇が生まれる。この新たな演劇の潮流に位置づけられる人物の1人が、演出家であり劇作家、そして俳優でもあるロベール・ルパーージュ (Robert Lepage, 1957-) である。

たとえばルパーージュの演出は、スクリーンに映し出されたイメージと生身の俳優の動きをシンクロナイズさせたり、客席からは本来見えない方向から舞台を映し出すことで観客に異なる視点を提供したりするなど、巧みに「見せる」ものとなっている。ルパーージュの作品はケベック州以外でも盛んに上演され、まさに「2つの孤独」であったフランス語圏と英語圏の交流に貢献してきた。同時に「映像の魔術師」といわれるルパーージュの作品は、言葉の壁を越えて、カナダ国内だけでなく、アメリカやヨーロッパなど国外でも受容された。もちろん日本も例外ではない。

日本においてこのようなケベック演劇の視覚性はしばしば注目を集めてきたが、近年は視覚性だけでなく、ケベックの抱える民族的問題への関心もさらに高まっているように思われる。その顕著な例が、ワジディ・ムワド (Wajdi Mouawad, 1968-) 作による『炎—アンサンディー』(Incendies, 2003) の上演である。レバノン出身のムワドは、1975年に起こった故国の内戦から逃れ、家族とともにケベックにやってきた移民であり、現代の移民作家を牽引している。『炎—アンサンディー』は、2014年に上村聡史演出のもと、麻実れいを主演に迎えて東京と兵庫で上演され、5つの賞を獲得した。中東系カナダ人の母を持つ双子の姉弟が、母親の遺言を通して、家族の秘密、そして自らのルーツを明らかにしていく様子は、ソフォクレスの『オイディプス王』を想起させる緻密な劇構造によって支えられている。『炎—アンサンディー』は、ケベックにおける移民のアイデンティティや中東問題を描き、ケベック演劇の多様性を日本の観客に印象づけた。

演劇には社会的・文化的背景がしばしば映し出される。視覚的な表象が多用され、ケベックのアーティストの関心がケベック州の外へと向けられた背景や、ワジディ・ムワドのような移民作家の登場には、「静かな革命」に端を発した近代化や、それ以降のマイノリティの台頭と不可分ではない。また、演劇は観客の目の前で物語が展開することで、観客に「今、ここ」というライブ性を俳優と共有させる。それにより、観客は舞台上の物語をより身近なものとして捉えることができる。ケベック社会に対する興味や理解を喚起させ、異文化交流のさらなる促進を図るためには、ケベック演劇の持つ役割は大きく、今後さらなる飛躍と浸透が期待される。



ジャック・カルティエ通り  
(廣松撮影)



## ケベックの児童文学

— 現代ケベック社会における児童文学 —

鈴木 智子(明治学院大学博士課程修了)

ケベックの児童文学について、日本ではまだあまり知られていない。この論考ではケベックで児童文学の発展をおおまかにたどり、活躍している作家について紹介させていただきたい。

ケベック児童文学のはじまりは、1921年サンジャンバティスト協会というカトリック系の団体から刊行された子ども向けの雑誌『青い鳥』からであった。雑誌が目的としていたことは、子どもに愛国心と道徳、宗教について学ばせることだった。その目的に最適であったのが歴史を主題とした物語であり、雑誌の中心はこの主題によるものが多くを占めていた。1923年には、『青い鳥』で連載されていたダブリュイ(Marie-Claire Daveluy)の『ペリーヌとシャルローの冒険』が出版され、この作品がケベックにおいて初めての児童文学となった。

その後1940年代は、ケベック児童文学が一時的に繁栄した時期であった。第2次世界大戦によりフランスから本を輸入することができず、本の不足から多くの出版社が児童向けの本を出版した。しかしこの状況は戦時下という特殊な状況であったため、戦後は再び外国の出版社との競争が始まり、多くの出版社が撤退せざるを得なかった。

1948年、この閉塞的な状況を打破しようと、「児童文学作家協会」が設立された。作家達を中心としたこの協会は1955年までの短い期間しか存続しなかったが、危機的だった児童文学の状況を好転させるのに大きな役割を果たした。1940年代から50年代にかけての児童文学は、伝統的な分野と新しい分野が混在する時期であった。

60年代に入ると、ケベックは「静かな革命」を迎える。児童文学にとって、教育が民主化されたことは、その存続に大きな危機をもたらした。それまで学校でのご褒美として配布される本の法律が廃止され、独自の市場が失われた。第2次世界大戦後の一般の本市場は、フランスや外国からの本で占められており、ケベックの出版社が対等に競争するためには、質も量もかなわなかった。

閉塞的な状況を打破しようとしたのが、1971年に設立された「子どもとのコミュニケーション」協会であった。この協会は作家を中心として、出版の状況を改善し、児童文学を再評価することを目的としていた。協会の働きかけによって、1970年代中ごろから、ようやくケベック児童文学は安定して出版を続けられるようになった。現在の児童文学の出発点は、この時代から始まったと言えるだろう。

1970年代、児童文学の再生期に、初期の段階に尊重されていた歴史を主題とした物語が、新たな形で描かれた。60年代から子どもに向けた作品を書いていたシュザンヌ・マルテル(Suzanne Martel)は、1974年に『王の娘、ジャンヌ』を発表した。マルテルは過去の歴史物語において重視されていなかった人物の感情や描写を詳細に描き、生き生きとした祖先の姿を示すことに成功した。これによってケベック児童文学の中で歴史物語は再び中心の主題となった。マルテルは歴史物語の分野だけではなく、多くの作品を書いているが、SF小説『SOS地中都市』のみ、日本でも翻訳されている。

続いて現在のケベック児童文学の中心となっている作家の一人にドミニク・ドゥメール(Dominique Demers)がいる。ドゥメールはこれまで様々なジャンルの50冊以上の作品を発表している。特に注目すべき作品は、青少年に向けたマリーリュンヌが主人公である性と死をテーマにした3部作である。この作品は2008年からはファンタジー3部作を発表するなど、様々な分野の作品を描いている。ドゥメールは作家だけでなく、ジャーナリスト、児童文学の研究者としても活躍しており、ケベック文学全体について広い視野を持ちながら活躍している。

マルテルやドゥメールのように、現在のケベック児童文学では様々なジャンルで活躍している作家が多くみられる。1人の作家が様々な分野で作品を発表していく傾向が今後も続くのか、作品とともに注目していきたい。

モンリアル大学の中庭と図書館(右奥)  
(廣松撮影)



## ハイチ滞在記：2

今井 達也（東京大学／専門調査員）



ジャクメルスの壁画(左)、カーニバルの様子(中央、右)(今井撮影)

夜中に道を歩くニワトリがいたら気をつけろ。自宅界隈で夜中に鳴き続けるニワトリがいるとハイチ人たちに話したところ、そのニワトリの鳴き方はどんなだ、コケコッコと鳴くか、あるいは喉元でクックククと鳴くか否か、樹の上にいるか等々と質問攻めにあつた。夜中なので樹上にいるかはわからないが、コケコッコと鳴いていると答えると、それなら大丈夫だとのこと。多分、奴らは樹上にはいるはずだ、と。では、どうするとうまくないのかと問えば、夜中にクックククと鳴きながらニワトリが道を歩いていたとしたら、それは誰かが不思議な力を用いて化けており、すれ違いざま、何やら仕掛けてくるかもしれないから要注意なのだという。時々犬にも化けるらしい。

実はこの手の話をよく耳にする。前回のレポートでも少し触れたララと呼ばれる集団の中には、宙に浮かぶ不思議な術を心得ている者もいるという。

ウェイド・デイヴィス(Wade Davis)著『ゾンビ伝説』によれば、ハイチにはビザンゴという名の秘密結社が存在すると言われている。厳密には、ビザンゴとは結社の儀式の名称であり、成員はサン・ポエル(獣皮のない者たちの意味)という。個々の結社は独自の名を持つが、総称してビザンゴと呼ばれている。西アフリカのギニアビサウの沖合に位置する群島のピッサゴが名の由来と言われている。奴隷貿易の名残だ。

成員になるには様々な知識が必要だ。魔術、合い言葉、儀式のための歌、踊り、シンボルの意味等々である。性別は問わない。組織は厳密な階級社会であり、トップは皇帝、以下、大統領...と、なかには法律顧問や会計係まで存在し、下層の成員は兵隊と呼ばれる。結社には縄張りがあるが、優れた指導者が新たにビザンゴを結成することも可能だ。

彼らは夜間に集会を催す。冒頭の様子はヴオドゥの儀式に似て、ペリスティルと呼ばれる場所で歌や踊りと共に行われる。掛け声と共にビザンゴ独自のリズムに変化し、マドゥレと呼ばれる棺が登場する。成員は手順に従い棺に敬意を表す。リーダーの演説の後、懸案となっている問題について話し合い等がなされる。晴れてその解決策が示されれば、その後、人々は祝い、踊り続ける。

このビザンゴだが、デュヴァリエ父子の政権(1957-1986。2014年10月には、その「子」にあたるジャン＝クロード・デュヴァリエ元大統領が死去した)と、ヴオドゥの司祭であるウンガン(女性司祭はマンボ)を介して密接な関係を有していたとされる。同政権は、各コミュニティ、特に農村部と密接な関係を持つウンガンやビザンゴの長を、各地域の行政機構の要職に登用していたようだ。ビザンゴはララとも深い関わりを持つ。ゾンビを生み出す特別な粉末の処方箋を彼らは熟知し、時にララはこの粉末を用い、夜中、悪事を働く者たちに制裁を加えるのだそうだ。

2015年1月12日、憲法の規定に従い上院議員の1/3及び下院議員の全ては任期を終えた。現在は、上院の定員30名の1/3となる10名を残すのみとなり、議事定足数を満たさず、議会は機能していない。選挙法修正案他、懸案事項について与野党間の包括的な合意が得られず、選挙が実施されずに至った現状だが、同時に、いくつかの進展も見られた。

そのひとつに選挙管理委員会の再編がある。当初、行政、司法、立法の3権から3名ずつ代表を選び合計9名としていた人事だが、これに対し野党は、各セクターから1名ずつ合計9名とする方法を主張した。より「バランスのとれた(équilibre)」委員会を編成するというのが野党の狙いだったようだが、政府は野党の要求を飲み、2015年1月、9つのセクターからなる委員会を発足させた。教育関係者、ジャーナリスト等々のセクターから各1名とあるなか目を引いたのは、「農業及びヴオドゥセクター」から1名という、新たに加わった規定だった。

当地のヴオドゥ信徒の中には、ヴオドゥとハイチ人の深い関係にも拘らず、虐げられていると語る者が少なからず存在する。一般的に権威主義的な独裁体制だったとされるデュヴァリエ父子政権との関係が指摘されることもあり、現在、確たるデータはなく推し量るのみだが、政権崩壊後、一定数の国民の間でヴオドゥを敬遠する向きが増長されたということなのか。ヴオドゥからキリスト教への改宗者の話はよく耳にするが、その逆はあまり聞かない(表向きかもしれないが)。ヴオドゥとキリスト教を同時に実践している者も数多く存在するとされるため、殊更にそれらを対立的に捉えれば実相を見誤ることにもなりかねないが、幾分か緊張した関係にあるということは、昨年、ハイチのカトリック教会の枢機卿がしたとされるヴオドゥ批判(後日、枢機卿は、「批判」ではないとして補足をした)が海外メディアで紹介された直後にハイチ国内で批判の声があがったことから窺い知れる。

今年は、上下両院及び地方議会選挙に加え、大統領選挙も控えている。本年中の選挙実施については、全てがうまく運ばばという条件付きではあるが、国際社会の支援のもと、ハイチ国民のための包括的な選挙の実施が待たれている。

(本稿は筆者(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程在籍)が在ハイチ日本国大使館勤務時(2014年2月～現在在職中)に執筆したものに加筆・修正したものである。内容は全て筆者自身の観点に基づく私見であり、何ら大使館の意見を代表するものではない。)

## 書評

『吾輩は日本作家である』(立花英裕訳, 藤原書店, 2014年)  
『甘い漂流』(小倉和子訳, 藤原書店, 2014年)

既に旧知に属する出来事であるかもしれないが、2013年12月、ハイチ出身のケベック移民作家ダニー・ラフェリエールがアカデミー・フランセーズ会員に選出された。当時は「生粋のケベック人作家」ではなく「ハイチ出身のケベック移民作家」が選出されたことに驚きと反発が無かったわけではないが、この文学史上の事件は概ね好意的に受け入れられたようである。

日本では、これまでに小説やルポ形式の邦訳が5冊出版され、また2011年には初来日も果たしている状況に鑑みると、彼は最も名の知られたフランス語圏作家の一人であるといえるだろう。これまでに邦訳された作品の中でも、2014年8月に藤原書店より相次いで出版された『吾輩は日本作家である』(立花英裕訳)と『甘い漂流』(小倉和子訳)は、これまで以上に彼らしい文体と物語をもった作品である。前者はそのタイトルからもうかがい知れる通り、自らを日本作家であると自称し始めるケベック州在住の作家が主人公となった物語である。本作では、とりわけ移民作家の「肩書き」を一つのきっかけとして、ラフェリエールが想定する柔軟なアイデンティティ把握の有様が描かれる。後者の『甘い漂流』は『帰還の謎』(小倉和子訳)と対になる小説作品とされ、ハイチ出身の主人公がケベックに移民した際の様子を俳句的な断章形式を交えて綴られていく。諧謔的に「遅れてきた」移民として描かれる主人公が新しい社会と邂逅し、適応していく物語は、ラフェリエールの自伝的物語であることを超えて、ある意味でより普遍的な移民の経験を巧みに物語化したものであるとも読み取れる。

ラフェリエールの連作小説は彼自身により「アメリカ的自伝」と呼ばれているが、変奏を伴って積み重ねられているこの連作が今後も継続的に邦訳出版されることを祈るばかりである。

(廣松勲)

日本フランス語圏文学研究会会報  
第5号 2015年 8月 4日刊

日本フランス語圏文学研究会

早稲田大学法学学術院立花研究室

(早稲田キャンパス8号館712号室)

〒169-8050

東京都新宿区戸塚町1-104

HP:

<http://litterature->

[francophone-2012.blogspot.jp/](http://francophone-2012.blogspot.jp/)

Mail:

[miyakoo385@hotmail.com](mailto:miyakoo385@hotmail.com)

## ★編集後記

日本フランス語圏文学研究会の会報「Archipels francophones」の第5号をお送り致します。本号の刊行までは、とても長い道のりでした。今回は特に私事が重なってしまい、大幅に遅れての刊行となってしまったこと、ご寄稿して頂いた方々には改めてお詫び申し上げます。

本号は現代のケベック文学を中心に様々な分野の方々から、エッセイを寄稿して頂きました。まずは作家ウーク・チョングさんの現代ケベック文学の概説、モンレアル大学名誉教授のリズ・ゴーヴァンさんによるフランコフォニー全体を視野に入れたご考察から始まり、続いて立花英裕先生による政治学者ジェラルド・ブシャールさんとの交流記、そしてケベック州の文化・文学(女性文学、児童文学、新郷土文学)・演劇といった多様なエッセイと、いずれも読みごたえのある文章をご寄稿頂きました。もしも読み足りないと思われた方は、是非ご寄稿者の他のご論文やご著作を参照して下さることをお願い申し上げます。さらに、本号には前号に引き続き「ハイチ滞在記」の第2回もご寄稿頂きました。ケベック州とも関わりの深いハイチ共和国の現在を、現地滞在中の専門調査員の方の視点から見られることはとても貴重な機会と思われれます。今後も継続的に滞在記を読めることを楽しみにしております。

最後に、刊行までの間、様々な形でご協力を頂いた方々に改めて心より御礼を申し上げます。

(廣松勲)



サン・ルイの風景 (山出撮影)